

子どもの日本語教育研究会

「通級方式による日本語指導—センター校の視点から」

(大阪市「帰国した子どもの教育センター校」 大阪市立阿倍野中学校 日本語・適応指導教室)

矢嶋 ルツ

1. 地域の実態

大阪市では在日外国人教育に取り組んできた歴史があり、これまでも各校で様々な教育実践が行われてきた。近年海外から編入学する子どもたちが増加し、2016年度には小学校223名、中学校71名、計294名の子どもたちが編入学した。市内には小学校290校、中学校130校、計420校があり、多数在籍校も存在するが、大部分の学校が少数在籍であり、在籍校も増加している。大阪市教育委員会では、1984年より順次小、中学校各4校に「帰国・来日した子どもの教育センター校」（以下センター校）を設置し、通級方式による日本語・適応指導や教育相談を行ってきた。開設当初は中国からの帰国者が多かったが、その後国際結婚の増加による呼び寄せが増え、家族間での人間関係の難しさや母語確立前に両国を行き来した子どもの言語習得や学力の難しさが課題となった。ここ数年は編入者数が急激に増加し、特に中心部の商業地域への編入者が多く、就労による編入が増加している。

全体では中国出身の児童生徒が約半数を占めているが、出身国や地域、言語が多言語化、多国籍化し、来日理由、保護者の状況、母国での教育状況など実に様々な背景を持っている。また在留の長期化、定住化から日本生まれ、小学校入学前に来日した子どもたちも増加しており、その子どもたちの日本語や学力の問題も課題になっている。

大阪府立高校では「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入試」が実施されているため、他の進路も含めセンター校通級生のほとんどが高校へ進学している。

2. 初期指導教室の概要

○開設年	1984年	木川小学校（淀川区）	豊崎中学校（北区）
	1990年	長池小学校（阿倍野区）	阿倍野中学校（阿倍野区）
	1991年	西九条小学校（此花区）	市岡中学校（港区）
	1992年	瓜破東小学校（平野区）	瓜破中学校（平野区）

○対象児童生徒 小学校1年生から3年生—日本語指導協力者の学校派遣

小学校4年生から6年生—センター校通級

中学校—センター校通級

加配校（多数在籍は校内に日本語教室を設置）

小学校8校 中学校1校

★ 海外からの編入があった場合

児童生徒本人、保護者と教育委員会担当指導主事、管理職、センター校担当者が
初期対応を行い、編入や日本語指導について話し合い、通級を決定する

○通級児童生徒数 (2016年度) 小学校4校 127名 (18カ国13言語)
中学校4校 111名 (16カ国13言語)

○日本語指導者

センター校担当教員	小学校6名	中学校7名
加配校	小学校8名	中学校1名
小学校低学年の日本語指導派遣協力者(民間)		17名

3. 日本語指導について

○指導期間 平均1年程度 週2回～3回の通級 1回2時間
旧日本語能力試験3級70%以上を修了の目安としている

○指導形態 通級形式—進度別にグループ指導または個別指導

- ★ 午前9:30～11:30 サバイバル日本語、初級前期
- ★ 午後2:00～4:00 初級後期

在籍校から市内公共交通機関を使いセンター校へ通級

在籍校と電話で出発等の安全確認、連絡帳などで通級日を確認している

通級者数の増加によりグループ毎の人数が増え、複式授業をせざるを得ない状況であるが、その反面個別の対応が必要な児童生徒が増えている

○指導内容 学校での日常会話、基本的な読み書きができる日本語能力の習得から
初級日本語指導

センター校担当者会議、研究部会で、学校生活や授業を意識した内容や
教材の検討、交流をしている

○使用教材

小学校低学年 派遣回数に限られているため、学校での日本語指導を目的とした
教材を作成している

小学校センター校

「ワクワクにほんご」(7言語対訳)「続ワクワクにほんご」—大阪市教育委員会作成教材

「ひろこさんのたのしいにほんご」「みえこさんのにほんご」「こどものにほんご」

「かんじだいすき」「絵でわかるかんたんかんじ」 国語プリント 自主教材 など

中学校センター校

「みんなの日本語」「日本語学級」「かんじだいすき」「絵でわかるかんたんかんじ」
自主教材 など、

- 課題 センター校に通級するために、在籍校の教科の授業が抜ける
通級者数が増加し、対応が追いつかない
学校、学年の違う複数の生徒を教えるため、教科指導との連携が難しい
教科学習の指導は在籍校になるが、時間や人の確保が難しい
中学生に適した教材開発の必要性

4. 在籍校との情報共有や連携

日本での生活の中で最も多くの時間を過す**在籍校**や**クラス**で、受け入れがスムーズに行なわれ、教室に自分の居場所があることが、日本語習得の意欲や教科学習の意欲につながると考えている。そのために常に**在籍校**の担任と電話や連絡帳で、日本語学習の様子と、クラスでの教科学習の様子や仲間関係などを情報交換している

○センター校で行っていること

日本語・適応指導—日本語指導と共に自立した学校生活をおくれるように指導する
教育相談・学校訪問
指導教材・貸し出し用図書^の整備・活用
帰国・来日等の子どもの教育推進(子どもの特性の保持伸長、国際理解教育)
帰国・来日等の子どもの教育推進に関わる研究活動や必要な諸事業

○教材の作成と提供

- ★日本語学習教材 「ワクワクにほんご」(7言語対訳)「続ワクワクにほんご」
- ★教科支援教材 日本語指導が必要な時期から教科理解を在籍校と連携して進める
小学校 リライト、デリート教材の作成
中学校 社会、理科の対訳補助教材(社会・理科)7言語対訳
「渡日生のための理科」(1年~3年)「英語ワーク」(1年~3年)
「渡日生のための基本数学ドリル」

○母語教室の設置

日本の学校に編入学した子どもたちの多くは、日本語や新しい学校への適応だけでなく様々な問題を抱えている。母語での教育相談や、子どもたちが母語で自分を表現し仲間と話せる居場所として母語教室が始まった。中学校センター校を中心に母語教室を開設し、母語保持育成を通じて、思考力や自尊意識を高める取り組みを行っている。

2017年度母語教室 中国語、フィリピン語、ネパール語、英語、スペイン語
タイ語、ベトナム語

(少数言語対応 ルーマニア語、ロシア語、韓国語、モンゴル語)

★ ワールドトーク (多文化スピーチ大会) ★ 中国語弁論大会

○教員研修 「帰国来日等の子どもの教育研修」の企画・運営

○多文化進路ガイダンス (年2回)の運営

5. 成果と課題

- 成果
- ・ センター校に経験と情報が蓄積される
 - ・ いつでも、どの言語でも、どこかの学校に編入しても、すぐ専門的な日本語指導を受けることができる
 - ・ センター校として教材などの研究や作成をし、広く情報提供ができる

- 課題
- ・ 通級者数が急増し、指導体制が追いつかない
 - ・ 日本語教室を修了すると日本語指導が終わったととらえられがちで、日本語教室修了後も在籍校で「日本語指導が必要な」子どもたちとして教科学習につながる日本語の支援が必要であることの理解が得られにくい
 - ・ センター校の日本語指導者の加配とともに、在籍校で日本語指導ができる体制が必要

6. その他

○地域でもこどもの日本語、教科学習、進路を支援する活動が広がっている

子どもを中心に教育現場、関係者が連携し、地域で生きていく場を支援する多様なネットワークが必要である

「ひまわり会」「サタディクラス」「たぶんか進学塾」「こどもひろば」「Minami こども教室」

「学習支援教室きらきら」など

○卒業生の発信から考えること

「自己実現」—将来の展望を持ち、自ら将来を切り開く力を育てる

- ・ 「今」を見つめないと「これから」は見えてこない
- ・ 自分の場で、自分の力でがんばれる支援
- ・ 子どもの持つ両方の言語、文化を認め自尊意識を高める場を作る
- ・ 自己決定をし、自信を持てる機会を多く作る
- ・ 人との繋がり、特に同世代の仲間が存在が大切
- ・ 保護者への教育参加の働きかけや支援
- ・ 教育の場や進路を保障する

⇒自己実現を保障する日本語力と学力の保障